

山本七平著「帝王学—『貞観政要』の読み方—」日経ビジネス人文庫、日本経済新聞出版社、2001年3月1日刊を読む

## 身に付けるべき心構えとは

1. (1)『孟子』に有名な「敵国外患なき者は、国恒に亡ぶ」という言葉がある。  
(2)一見矛盾するようだが、これを「競争なき独占は恒に滅ぶ」と読むと面白い。  
(3)いずれにせよ。  
(4)こうなると部下は恐れて直言しないという「情報遮断」が起こるが、同時に、部下同士も、なるべく論争などにならず、なるべく内部の意見の対立などないようにして、一応、表面はすべてうまくいっているように取りつくろうという状態を現出する。  
(5)そうなると、現実には何が進行しているのか、だれにもわからなくなる。  
(6)いつものように出社したら、会社が倒産していた、などという、あり得ないようなことが現に起こっている。このような状態を招来するのが、問題である。
2. (1)「貞観政要」の政体第二・第二章ではまさにこの問題を取り上げている。  
(2)「人の意見は、一致しないのが普通である。  
(3)そこでその是非を互いに論じ合うのは、本来、公事のためのはずである。  
(4)ところがある者は自分の足りない所を隠し、その誤りを聞くのを嫌い、自分の意見に対してその是非を論ずる者があれば自分を恨んでいると思う。  
(5)これに対してある者は恨まれて私的な不和を生ずることを避け、また『相惜顔面』すなわち互いに相手の面子を潰しては気の毒だと思って、明らかに非であると知っても正さず、そのまま実施に移す者がいる。  
(6)一役人の小さな感情を害することをいやがって、たちまち万民の弊害を招く。  
(7)これこそ、まさに亡国の政治である」と。
3. (1)『貞観政要』の中にはさまざまな学ぶべき点があるが、何やら日本の欠点を指摘されているような気持になるのがこの部分である。  
(2)前に塩野七生氏と「コンスタンチノーブルの陥落」について対談したとき、その国を興隆に導いた要因が裏目に出ると、それがそのままその国を亡ぼす要因となる、と私がいうと、氏は即座に賛成され、間髪入れず、日本の場合はそれが「和」であろうと指摘された。  
(3)確かにわれわれは論争を嫌い、相手の感情や面子を尊重して、「マア、マア」で全体の和を保とうとする。  
(4)そして、これが実の能率的だということは「論争が国技である」イスラエルに行くにつくづく感じて、「国の破産状態をよそに、論争ばかりしているから、何一つてきぱきと解決できないのだ」という気がする。彼らもそれに気づいているらしく、もちろん冗談だが「日本の財務省と経済産業省をそっくり輸入し、和を第一としたら……」などという。

(5)確かにそういえる面があるが、塩野氏の指摘通り、「和」には恐ろしい一面がある。太宗はつづける。

4. (1)「隋の時代の内外の役人たちは、態度をはっきりさせず、どっちつかずの状態にいたために、亡国の大乱を招いてしまった。
- (2)多くの人は、この問題の重大さに深く思いを致すことはなかった。そうしていれば、どんな禍<sup>わざわ</sup>いが来ても自分の身には及ばないと思い、表面的には『はい、はい』と従って陰で悪口をいい合いながら、それを憂慮すべきこととは思わなかった。
- (3)後に大乱が一気に起こり、家も国も滅びる時になって、わずかに逃げのびることが出来た者も、また刑罰・殺戮にあわなかった者も、皆艱難<sup>かんなんしんく</sup>辛苦の末やっと逃れたのであり、そのうえ、当時の人からひどく非難・排斥される結果になったのである。
- (4)そこで諸官は私心・私的感情を除き去って公のためにつくし、堅く正道を守り、腹藏なく善いと思う意見を述べ、絶対に、『上下雷同』すなわち上と下が付和雷同するようなことがあってはならない、と」。

P.66 ~ 69

[コメント]

国を亡ぼすか否かは何によって決せられるか、「貞観政要」の指摘は参考になる。1年のGDPの2.5倍にあたる1000兆円以上の国と地方の借金を抱えた上に、超少子化、超高齢化、デフレも抱えた日本国や自治体の運命を誰に担わせるか、その各々の担い手がどのような政策を打ち出すのか、押し黙って見ていることは許されない。堂々と衆目の前で議論すべきと考える。

— 2013年6月15日 林 明夫記 —